

[はじめに]

念仏を比較思想の視点から考察する。念仏を多方面からアプローチすることができるよう間口を拓げる内容となる。

1. 念仏思想の経緯

三念：念仏・念法・念僧

六念：念仏・念法・念僧・念戒・念施・念天

十念：念仏・念法・念僧・念戒・念施・念天・念休息・念安般・念身・念死

(1) 六念（六随念 cha anussatti）

① 六念(六修法)は平等尽苦、和合衆・無有諍訟を説く。（「長阿含経」十上経、大・I・54a）

② 六念は如来相見の如何に拘わらず常随修習すべきを説く。（「雑阿含経」八五八経、大・II・218 b）

③ 王は問う、『尊者ナーガセーナよ、あなたがたはこのようにいわれます。——「たとい百年間も悪を行っても、臨終にひとたび仏を念ずることを得たならば、その人は天上に生ずることができるであろう」と。わたしはこのことを信じません(…)]』

『大王よ(…)小さい石でも舟なくして水の上に浮かぶでしょうか?』

『尊者よ、そうではありません』

『大王よ、百の車に積むほどの石くずでも、船に載せられたならば、水の上に浮かぶでしょうか?』

『尊者よ、そうです。水の上に浮かぶでしょう』(中村・早島)

…buddhagatāsati

(2) 三昧体験

① 一法とは何であるかと言えば、すなわち『現在の仏が現前に住し給える』と名付ける三昧で、多聞の人に先じた諸法を成就するであろう。（『蔵文和訳 般舟三昧経』2・14）

② 彼は〔自分が〕聞いたそのままの〔無量寿仏の〕形相によって『この仏国から西方の方角に〔ある〕、百千万億の仏国を過ぎた安樂を有する世界(極樂世界)において、かの無量寿正等正覚如来世尊が現在、菩薩の集団によって遍く圍繞されて前面にされ(尊敬され)お坐りになっておられる。生活されている。留まっておられる。また、法を示しておられると思念するのである。彼はまた、心を散乱させずに如来を思念するのである』(同上 3・19)

初期大乘仏教における「般若波羅蜜=念仏三昧」

③ 「たとひわれ仏を得たらんに、十方世界の無量の諸仏、ことごとく咨嗟して、我が名を称せずは、正覚を取らじ」（『無量寿経』）

④ 『汝もし念ずるに能わずは、無量寿仏と称すべし』と。かくのごとく心を至して、声をして絶えざらしめて、十念を具足して南無阿弥陀仏と称せしむ。 仏名を称するがゆえに、念念の中において八十億劫の生死の罪を除く。命終の時、金蓮華を見る。猶し日輪のごと

くしてその人の前に住す。一念の頃のごとくに、すなわち極楽世界に往生することを得ん。
(『観無量寿経』)

→五念門行：①礼拝②讚嘆③作願④観察⑤廻向
→善導(Shan-Tao 613-681)、法然(1133-1212)

2. 歌う念仏、踊る念仏

(1) 引声念仏、融通念仏

円仁 ()：法照流五会念仏、表歎念仏、打槌念仏、引声念仏、短声念仏、高声念仏など。

良忍 ()：融通念仏

① ソレ五音七音ハ人々生得ノヒヒキナリ、弥陀浄国ノ水鳥樹林ノサヘツル音、ミナ宮商角
徴羽ニカタトレリ。コレニヨリテ、曾祖師聖人ノワカ朝ニ応ヲタレマシマシテ、真宗ヲ
弘興ノハシメ、コエ仏事ヲナスイハレアレハトテ、カノ浄土ネ依報ノシラヘマナシテ、
迦陵頻伽ノコトクナル能声ヲエランテ、念仏ヲ修セシメテ、万人ノキキヲヨロコハシメ
随喜セシメタマヒケリ。(『改邪鈔』)

② すなわち良忍は思想家ではなくて堂僧であり、したがって念仏芸能者であるとともに日
本声明史上最大の音楽的天才であった。(五来 7・20)

…融通念仏、勧進、賦算道御(唐招提寺、法隆寺)や一遍(浄土宗西山派)も、融通念仏・
勧進・賦算などの手法を使った。

(2) 踊躍歡喜念仏

① 念仏芸能の中で踊念仏はとくに重要な位置を占めるもので、その風流化もきわめて多種
多様であり、念仏の芸能性を遺憾なく発揮したものといえる。引声念仏も行道をともな
ったことがあきらかであるので舞踊への萌芽をもっていたと言えるであろうが、念仏が
舞踊化する直接的契機は田楽との結合にあったと言わなければならない。わが国の踊念
仏の祖を空也に帰するとともに、朝鮮や中国の踊念仏を元暁と少康にもとめることが従
来の説であるが、これを単に大無量寿経(下巻)や坐禅三昧経の踊躍歡喜の文だけで解
釈するには、あまりにも雑多な要素が踊念仏に付されている。(五来 7・60)

…融通大念仏狂言の代表・壬生狂言は道御が創始。持斎念仏から六斎念仏へ。高野聖や空
也僧の関与、さらに西山派や真宗高田派なども加わったのではないか。

(3) 高度に洗練された称名念仏

インドや中国の浄土仏教ではうまく説明がつかないほど、日本浄土仏教の念仏は野性的
で原初的で越境する営みとなり、庶民信仰となった。

これを法然・親鸞はきちんと仏道におとしこんだ。

①今パキスタンでは、厳格なワッハブ派のイスラム教学者(ムッラー)や宣教師たち(タ
ブリーグ)が幅をきかせて、聖者廟で聖者に尊崇を表すことは異端(シルク)だと言うん
だ。あの偽善者ども、座って法学書を片手に髭の長さがどうだとか議論して、預言者が伝
えたい真実を聴くことができないんだ。(パロミタ友美訳 230)

3. 鈴木大拙の念仏論

(1) 念仏の二側面

- ①「名は力なり」との考へにて口称せられる、つまりの陀羅尼又は神呪として口称せらるるものと見てよい。ここでは名それ自体が奇蹟を行ずる或る不思議な力を有するものと見做される。(鈴木大拙「禪と念仏の心理学的基礎」4・312)
- ②名号は、必ずしも其処に暗示せられてあるものを対象として称へられず、それよりも寧ろ称名によつて誘致される或る心理的過程を成就せんがために称へられるのである。(同上 314)
- ③ 称名念仏の発達は、哲学的、宗教的基礎の上に立つと見得る如く、又心理的基礎の上に築かれてあるものと云つてもよい。(同上 327)
- ④ 名を与へることは弁別することである、弁別することは個物の実在を認むることであり、又、個物を知的にも情的にも理解することである。それ故に、名が呼ばれるとき、我々はその対象が我々と共にあることを感ずる。而して、仏を憶念することが、漸次に転じて仏の名号を呼ぶといふことになつたのは、極めて自然なる発達の過程であつた。(同上 328)

(2) 定型の信仰告白

- ①「南無阿彌陀佛」を不断に繰返すことは、回教徒が神の名アラー (Allah) を繰返すのに酷似する。このことは、ニコルソンが、その著『イスラム神秘主義の研究』に於いて、観察したところある、曰く、「ファナ (fana) 即ち自我よりの蟬脱、又はパスカルの云ふ如き「世界を忘れる、神以外の総てを忘れる」と云ふ心理的狀態を誘致せんがために、回教神秘家達によつて行ぜられる方法である」と。(同上 332)

4. 坂東性純の比較研究

(1) 名を称えるということ

「イエスの祈り」の三段階… (i) 何度も繰り返して唱える、口業・身業における条件付け。
(ii) 声に出さずに唱えれば意業の習慣づけに相当する。(iii) 内面化が十分に果たされると、祈りは心臓に入り込んだ状態となり、鼓動と共に自然に唱えられる。

- ①キリスト教徒にとって「イエス」の名は、同時にイエスの受難や十字架や復活や救済のわざを想起せしめるものなのである。この点においても、名は単なる名ではない現実が、この語においても見出せるのである。つまり、この場合、名は単に名のみではなく、名にまつわるすべてのものと共にあり、名のいわれの総体を含んだ名である。この事は、「南無阿彌陀仏」という名号についても同様である。浄土教徒にとっては、名号とは、名号のいわれをも含めた名であつて、決してレッテルや記号のごとき偶然的な、置換の利くものではなく、いわれと不可分の名号である。よつて念仏を称え、聞く人は、同時に名号のいわれを聞いているのである。(坂東 105)

(2) 相似点と相違点

相似点：①両者には御名に対する絶大な信が基調をなしており、共に御名を媒介とした救済が目指されているということ。しかも共に御名に基づいた最も簡潔な宗教的实践たる称名行を説いている。②その根底に超越的なものの促し（聖霊・本願他力）による点。③数多くの御名を称える初歩的な教説をもっている。④称名の中に、讃歎・懺悔・礼拝・感謝・信仰告白等の要素、さらには祈願請求の利己的動機をも包容している点。⑤実践にあたって善知識の教えが不可欠な点。⑥称名の根底に機法二種の深信の成立を見る。⑦僧院に起こり、僧院を出て、広く一般在家信徒にも及んだ点。

相違点：①親鸞の念仏の還相重視は、イエスの祈りに見られない。後者は往相重視。②念仏には、イエスの祈りのような微に入り細を穿った懇切さがない。(初心者にも丁寧らしい)③称名念仏に比べると、イエスの祈りは局所的。④イエスの祈りには、出家隠遁者的あるいは静寂・敬虔主義的残滓が多分に残っているのではないか。⑤イエスの祈りには、念仏の裏付けとなる誓願に当たるものの位置づけが明確ではないようだ。

→親鸞「聞名」

[まとめ]

日本仏教の念仏は、仏道修行・浄土願生・鎮魂・死者儀礼・信仰告白・芸能など実に多面多層の様相を展開してきた。それらは庶民信仰や習俗・俗信などに見做されて、民俗学の領域で取り上げられる程度の扱いになっている。しかし、高度な教義体系が見落としがちな宗教の本領を内包している可能性もある。比較宗教・比較思想の取り組みによって、念仏のダイナミズムを垣間見ることができないのではないか。

[引用文献・論文]

宇治谷祐顕「阿含経諸説の「六念」説-「別訳雑阿含」所訳の問題提起について-」『印度学仏教学研究』23(2)印度学仏教学会

中村元・早島鏡正訳『ミリンダ王の問い』東洋文庫 1988年

林純教『蔵文和訳 般舟三昧経』大東出版社 1994年

五来重『五来重著作集 第七巻 民間芸能史』法蔵館 2008年

ウィリアム・ダルリンプル (パロミタ友美 訳) 『9つの人生 現代インドの聖なるものを求めて』集英社新書ノンフィクション 2022年

鈴木大拙『鈴木大拙全集 第四巻』岩波書店 1968年

坂東性純「イエスの祈りと念仏」『比較思想研究』通号3 比較思想学会 1976年

[参考文献・論文]

吉元信行「十随念の成立過程」『佛教学セミナー』11号大谷大学佛教学会 1970年

河波昌『浄土仏教思想論』北樹出版 2001年